

デカルトにおける「人間的な諸根拠」の問題

— 哲学を支える論証の力

佐藤真人

(日本学術振興会・東京大学)

デカルトは1638年2月22日付のヴァティエ宛書簡において、『方法序説』での神の存在証明の不充分さを認めているが、この自覚が『省察』執筆の契機になったことはよく知られている。この書簡は端的だが明確に『序説』と『三試論』の狙いと、この時期のデカルトの関心を語って興味深いものだが、その議論の中心は、形而上学と自然学における真理の根拠 *rationes/raisons* という点にある。デカルトにとって真理の根拠の探求は『序説』前後に始められたものではなく、前期デカルト哲学を特徴づける中心テーマの一つであるが、その内容は大きく以下三つに分類される。

1) 知識一般の根拠 : デカルト哲学は、知識を根拠づける明証性の探求から始まり、その規範として数学研究が第一に選ばれた。さらに、数学のような規範的明証性を支える一般的な根拠の探求にまで遡った認識論的研究が、『規則論』までのデカルトの主な関心事であった。ここでは、数学的明証性を支える根拠が、精神において明示的・暗示的にも二重構造について、精神がもつ直観、単純本性と、自然によって植え付けられた真理の種子の例を通して分析する。

2) 物象の論証根拠 : 『規則論』執筆後、デカルトの関心は急速に自然学へと移る。それまで問題だった内在的な認識の根拠のみで自然学を論証することは不可能であり、外部にある事物の知識の根拠を示すことが、自然学の樹立のためには喫緊の課題だった。そしてデカルト自然学の論証根拠は一種類ではなく、全知識を順番に導き出すための第一根拠としての仮定または「寓話」から、その第一根拠の真理を経験的に証明する役割を負った「最後の根拠」まで、その水準が分かれる。ここではデカルト独自の論証の根拠となる「寓話」の構成と役割、そしてそのような真理論証を可能にする精神の内在的な「力」について焦点を当てる。

3) 形而上学的根拠 : 自然学を支える根拠は論証的側面に留まらず、存在論的側面をも併せ持つ。その端的な表れは、いわゆる「永遠真理創造説」と『世界論』の「寓話」に明らかで、自然とその法則の創造者たる神の存在とその属性であり、世界は存在論的にも認識論的にも神に支えられていることが示される。ところがヴァティエ宛書簡では反対に、デカルトの諸原理に従うなら、「人間的な諸根拠が信仰を支えることができる」と哲学者は述べている。「人間的な諸根拠」とはこの場合どのような意味で、なぜ信仰を、さらには形而上学を支えることができるのだろうか。ここではまず、『序説』第三部の語る「暫定的道徳」が自然学において発揮する実践的な意義を分析することで、「自然の主人で所有者」という『序説』第六部の有名な表現が、認識論的・自然学的な観点に根差した道徳的な意味を明らかにする。次に、「第四答弁」が述べる化体の自然学な類推による考察に光を当てることで、明証性と自然学の根拠の探求を経て、その基礎が確立されたデカルト哲学が、啓示に頼らない自然の光のみによって、どのような「人間的な諸根拠」が形而上学を支えることができるのかを分析する。

これら三つに区別される根拠は、デカルト哲学そのものがそうであるように、相互に密接に関連し、分離不可能である。これらの考察によって、デカルトが若年から一貫して探究したものを、そしてそれらに不足し、今後の研究のために必要なものをどのように自覚していたのかを浮き彫りにする。ここでのデカルトの課題は「論証の力」であった。

デカルトは因果性の探求には早くから注力し、とりわけ自然学研究において、全事物の第一原因たる神に至った。しかし『序説』の出版は、そこで不十分だった形而上学的な論証を強化するため、更なる根拠を提示する必要をデカルトに感じさせた契機となった。これは因果性においても同様で、第一原因は神と言明するだけでは充分ではなく、それは根拠によって論証されなければならない。デカルトは「第四答弁」で、自己原因としての神は、いかなる意味で自身の作用原因となり得るのかを証明するため、「神の広大な力能」を「事物の肯定的な本質」からの類推によって議論し、説得を試みる。これには「永遠真理創造説」で唱えられた「全体で作用的な神」の概念が下敷きとしてあるが、作用因による因果性の議論を神にまで敷衍し、自己原因としての神の議論を進めるためには、まず第一に、その根拠を理解しやすい「類推」の形式によって示さねばならなかった。すなわち、有限な精神の認識論的水準においては、根拠が原因を支えるのであって、根拠を明らかにして初めて原因を確立することができるのである。

因果性による原因の探求は、自然学の基礎を樹立するだけでは充分ではなかった。我々の理解のためには、第一原因を含むすべての原因を支える根拠が明らかにされて、初めて因果性による知識はその明証性を確固たるものにする。「考える私」と神の発見によって全知識の基礎が発見されたが、『序説』第四部の言明はそれだけでは充分ではなかった。基礎は根拠に支えられて、初めて論証されるのである。論証の問題には、他の精神を説得する問題が必然的に含まれる。デカルトが説得について並々ならぬ関心を持っていたことは、その記述の随所から伺えるが、根拠は説得のために必要な手段でもあった。デカルト哲学において根拠がこのように持つ論証的・言語的さらにはレトリック的な働きについて、最後に分析したい。

本論は以上の考察を通じ、「人間的な諸根拠 *rationes humaines*」の探究は、次に形而上学的な因果性、すなわち「第二答弁」が述べる「原因または根拠 *causa sive ratio*」としての神の探究へ自らが歩を進め、さらには他の精神を説得して共に進むために、予め必要な発見的手続きであったことを明らかにする。